

暖房機導入による夏秋トマトの作期幅拡大

農業研究センター 高原農業研究所

研究のねらい

高原地域では雨よけハウスを利用した夏秋トマトの栽培が行われているが、施設の利用期間は年間およそ5ヶ月半と短く、利用率は低い。

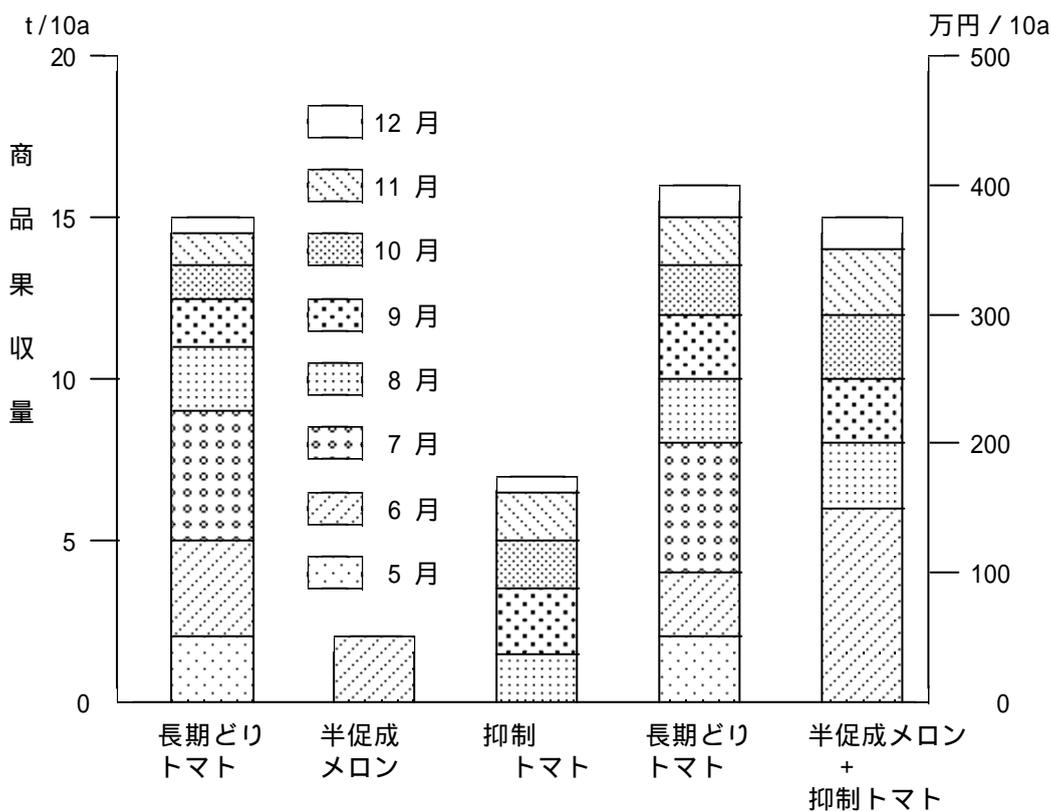
そこで、施設の利用率を引き上げ生産性を向上させることを目的として、暖房機導入による夏秋トマトの作期幅拡大の可能性をトマト一作型である「夏秋長期どりトマト」、及びメロンとトマトを組み合わせた「半促成メロン+抑制トマト」の二つの作型で検討した。

研究の成果

1. 「夏秋長期どりトマト」では、1月20日播種、3月9日定植、5月11日～12月15日収穫の作型で、およそ15.3t/10aの商品果収量及び432万円/10aの粗収入が得られる。
2. 「半促成メロン+抑制トマト」では、2月1日播種、2月24日定植、6月2～4日収穫の半促成メロンで、およそ2.8t/10aの商品果収量及び140万円/10aの粗収入が得られる。
3. また5月11日播種、6月23日定植、8月4日～12月15日収穫の抑制トマトで、およそ7.7t/10aの商品果収量及び282万円/10aの粗収入が得られる。したがって粗収入の合計は422万円/10aとなる。
4. 二つの作型を比較すると、粗収入は同程度であるが、「夏秋長期どりトマト」の方が経費が少なく有利である。しかし栽培期間が長いため、着果不良や品質低下を招きやすく生産が不安定となりやすいので、肥培管理や温度管理には特に留意する必要がある。

第1図 現在の作型と設定した新作型

作型		作期(月)											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
現在の作型(夏秋トマト)													
新作型	夏秋長期どりトマト												
	半促成メロン+抑制トマト												
(参考)八代における抑制トマト+半抑制メロン													



第2図 新作型の収量及び粗収入

注) 粗収入は各月の商品果収入に熊本県産の月平均単価(経済連調べ、H2~4年の平均)をかけて求めた。
ただし、メロンは6月上旬の平均単価を使用した。